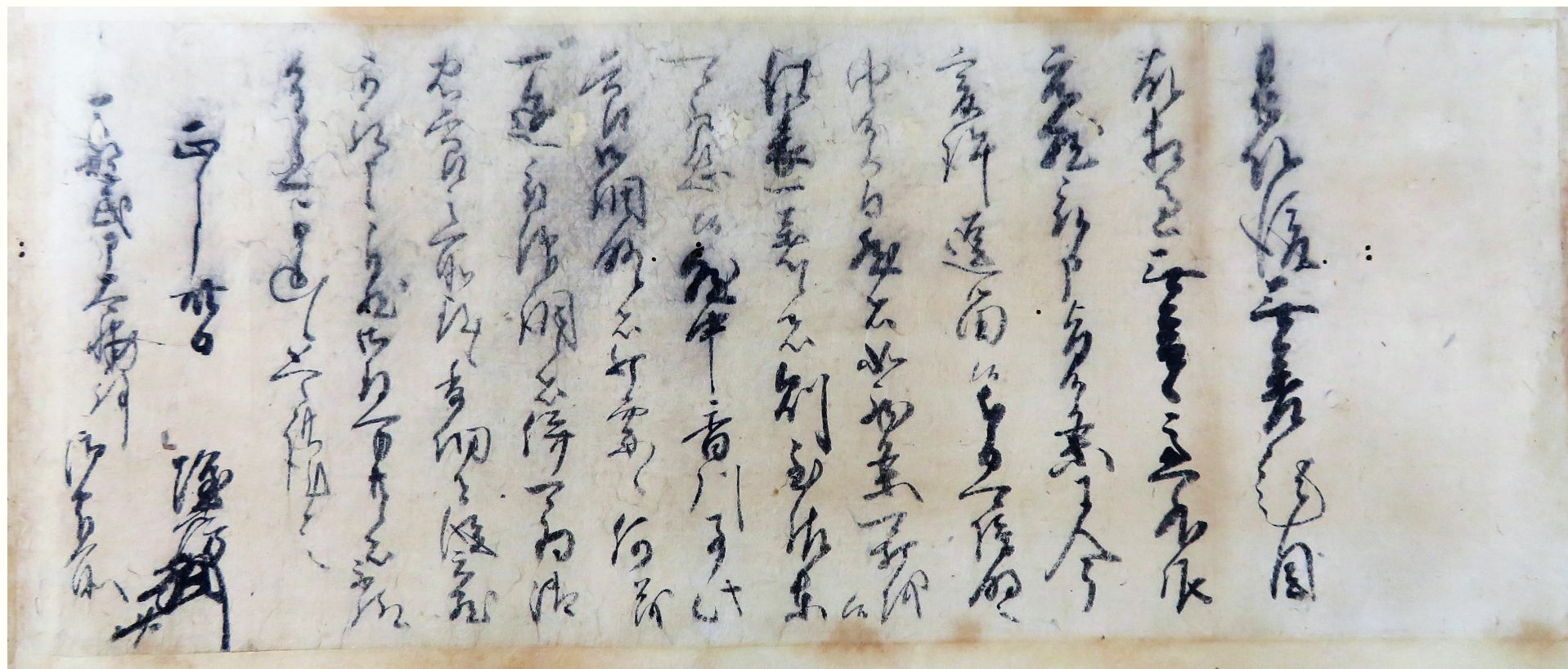


陶隆房（晴賢）書状

複写資料275(1)

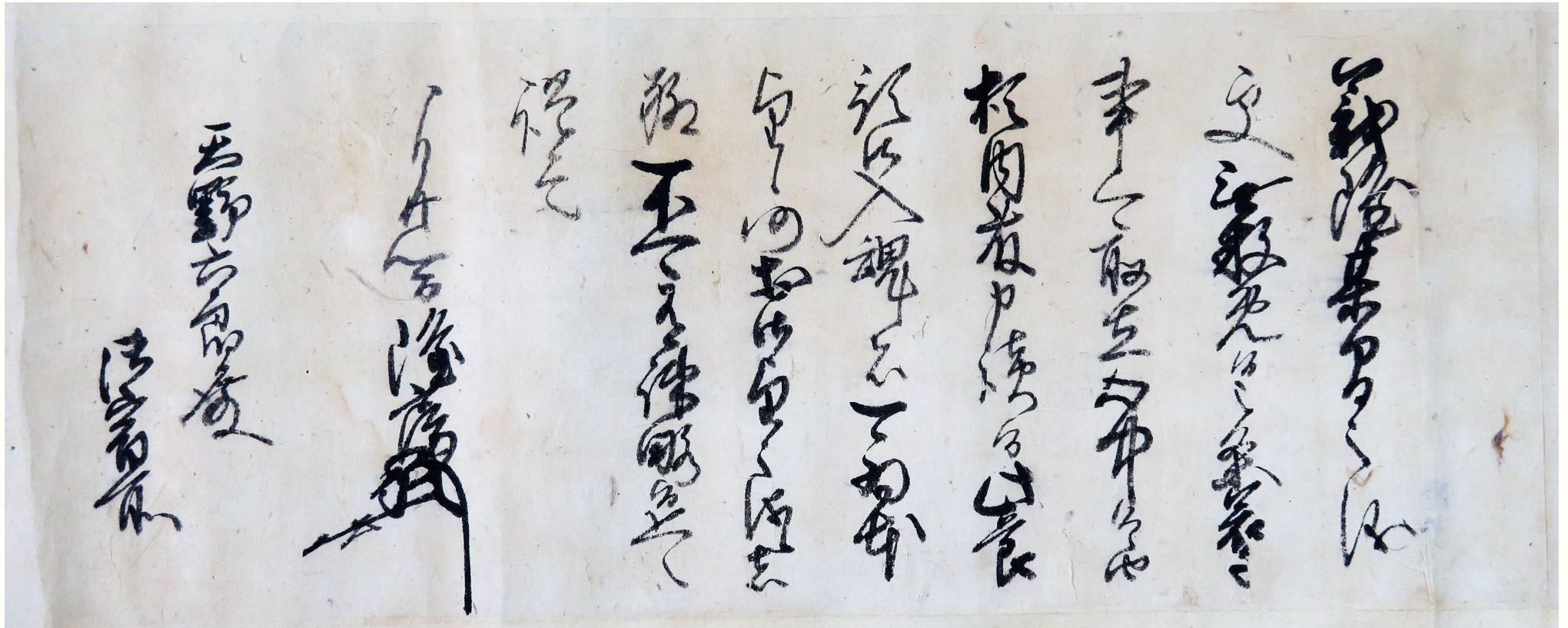


安芸武田氏を攻める準備を！

陶隆房（晴賢，1521～55）が、安芸武田氏の攻略に取り掛かるので協力するように、安芸国人の天野興定へ伝えたものです。☞解説シート①

陶隆房（晴賢）書状

複写資料275(1)

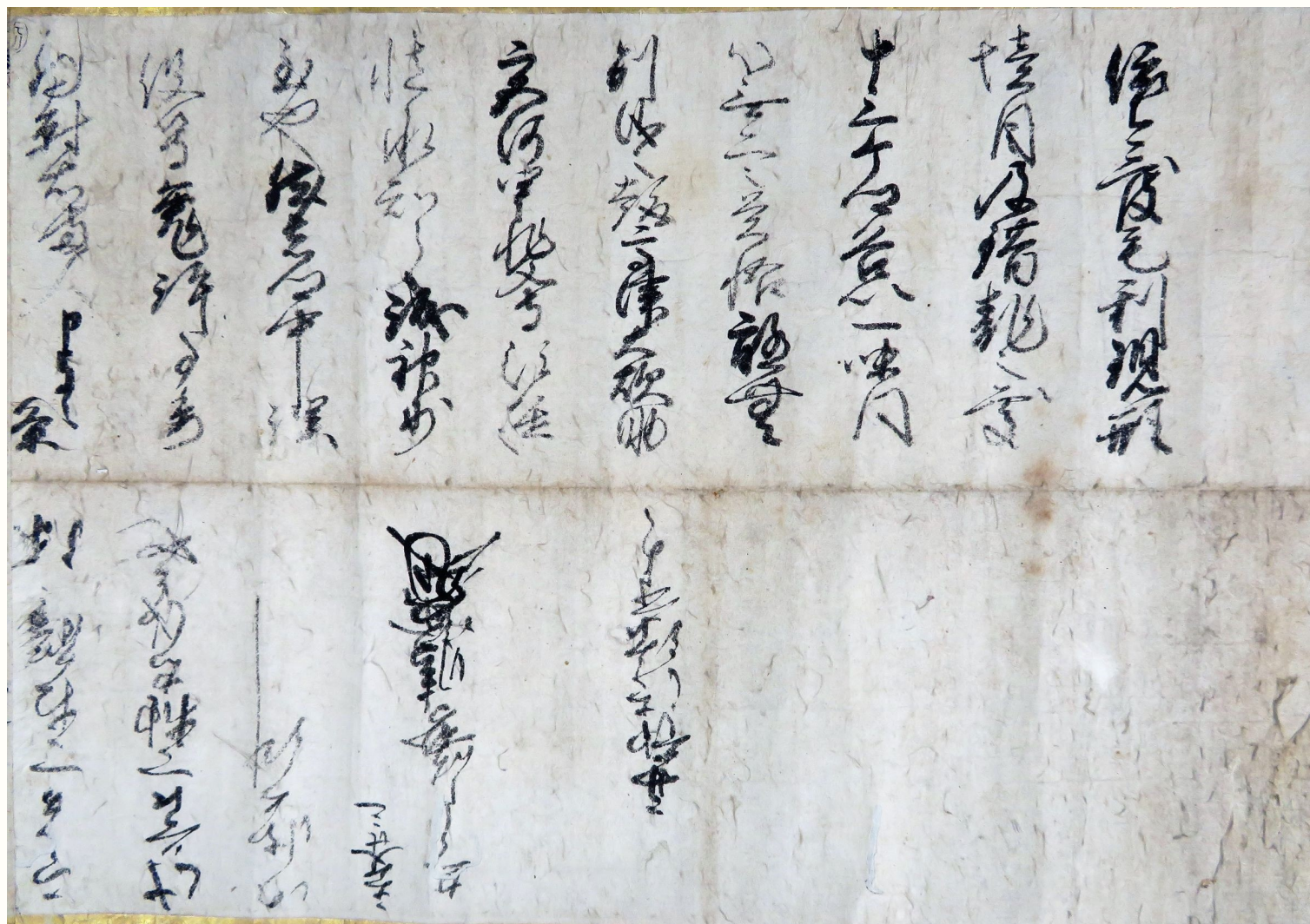


主君・義隆との関係はもはや修復不可能！

陶隆房（晴賢，1521～55）が、主君・大内義隆を廃して義隆の幼子を後継者とする計画を安芸国人の天野隆綱に告げて、協力を要請したものです。☞解説シート②

陶晴賢感状

複写資料280



味方に留まったのは感心なことだ！

陶晴賢（1521～55）が、毛利氏が離反した際に大内方に留まった山代荘の十三ヶ郷（現、岩国市）に、褒美として税を免除する旨を山代荘生見（現、岩国市美和町）の地侍である船越氏に伝えたものです。

☞解説シート③

宮川甲斐守腹切岩

参考1



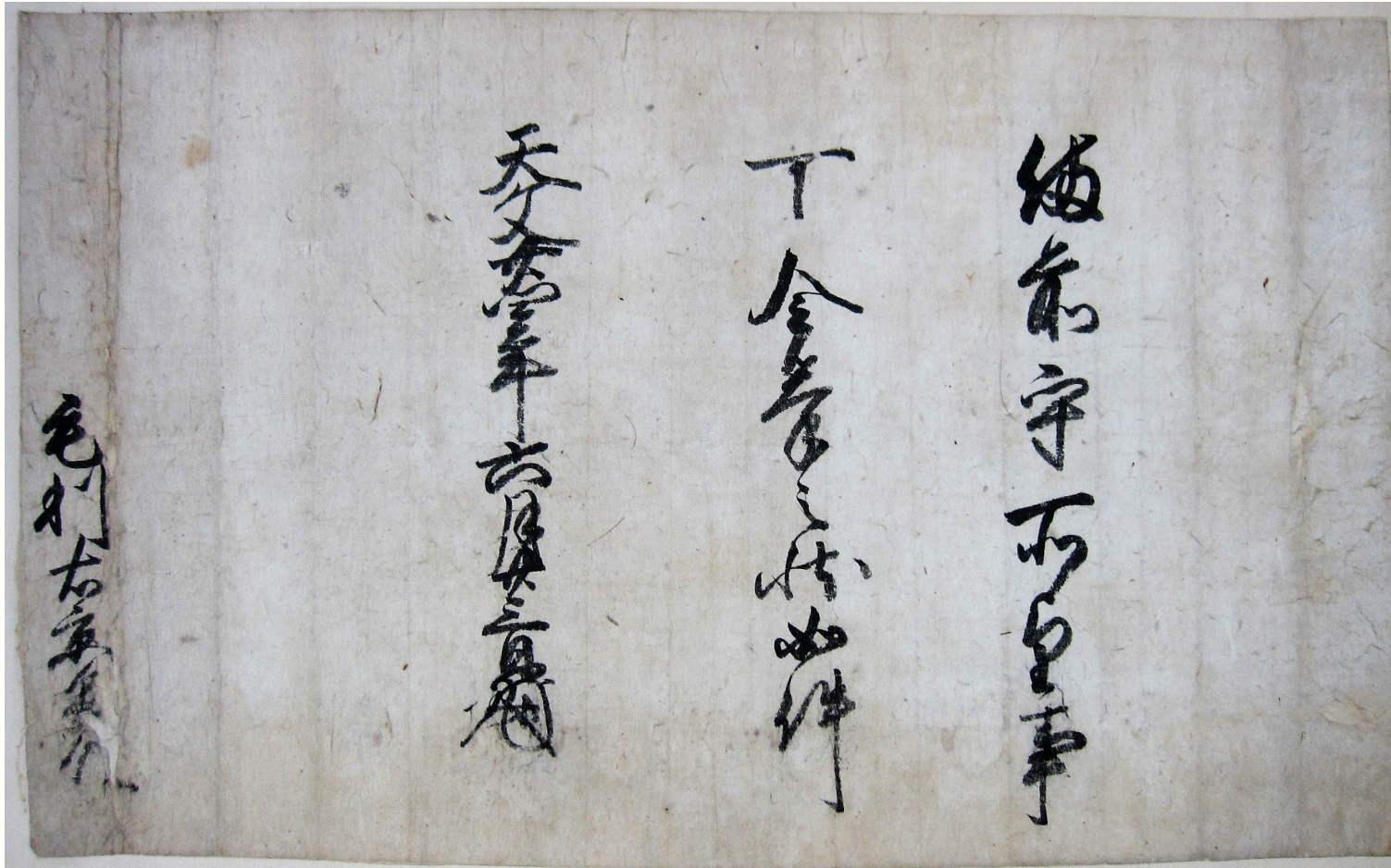
宮川甲斐守腹切岩 (広島県廿日市市)

陶氏を中心とする大内勢と毛利勢が戦った天文23年（1554）6月5日の明石口の戦い（折敷畑合戦）。敗れた宮川甲斐守は、この岩の上で切腹したと地元では伝えられています。甲斐守は陶興房・隆房（晴賢）の2代に仕え、永正8年（1511）の京都船岡山の戦いをはじめ数々の合戦に参加して武功をあげた、陶氏の有力武将の一人でした。

宮川甲斐守の実名は、一般には「房長」として知られていますが、専門家の間では疑問視されていました。ところが近年、山口県文書館の史料から実名が「房頼」であることが判明しました。実例から判断すると、陶氏家臣の宮川氏やその本家と思われる大内氏家臣の宮川氏の通字（代々伝わる字）は「頼」です。したがって、主君である陶興房から授けられた「房」字と代々の「頼」字を組み合わせた「房頼」は、わかってしまえば納得がいく名前なのです。

陶晴賢官途吹拳状

山口市林家文書1（15の4）



備前守に推薦する。

陶晴賢（隆房，1521～55）が、天文24年（1551）年に望み通り、備前守に推挙する旨を毛利房元に伝えたものです。官職を与えるのは、本来は朝廷の役割でした。そのため陶氏の主君である大内氏の場合、朝廷でなく大内氏自らが官職を与える場合でも、任命書においては形式的に朝廷に推挙する旨の文言を使っています。陶氏の場合も、同様であったと考えられます。

なお、宛名の毛利氏は南北朝期以降に安芸毛利氏から分かれて防長に移住し、大内氏家臣となっていた家です。毛利房元も身分的には大内氏家臣ながら、陶氏との関係を徐々に強めていった結果、陶氏から官職をもらったと考えられます。